

ASEAN グローバルプログラム に参加して

北原 百華
Momoka KITAHARA
数理情報学科 2年

1. はじめに

2017年8月29日から9月7日にかけてベトナムのハノイおよびその周辺とシンガポールにて、企業見学や現地の大学訪問を含む約10日間のASEANグローバルプログラムに参加した。このプログラムの主な目的は、海外経験を持つことで自らの考え方やものの見方を広げることであった。今回の研修日程を表1に記す。

表1 研修日程

8月29日	ベトナム入国 オリエンテーション
8月30日	現地企業訪問
8月31日～9月1日	現地大学生とPBL
9月2日	観光 自由時間
9月3日	シンガポール入国
9月4日	南洋理工大学キャンパスツアー
9月5日	トークセッション ビジネスパーソンとの交流会
9月6日	自由時間
9月7日	帰国

2. 研修内容

2.1 企業訪問

ベトナムでの企業訪問では、日系企業のTakagi Vietnam、現地企業のRikkei SoftとNTQの3社を見学した。一番印象に残っているのは、どの企業の人でも「ベトナム人は、日本人と違って、自分のいる会社より賃金の高い会社があれば、迷わずその会社に移る。」と言っていたことである。日本では、安い賃金であっても転職ばかりしては、かえって

良い職場に就けないので自分の気持ちを押し殺しても同じ会社で働いている人がほとんどであるだろう。そういう点で、私は、自分たちが働く会社を選ぶのだというベトナム人の職業観を好ましく感じた。また、どこ企業でも日本語を流暢に話すベトナム人が多いことが気がかった。主に、Rikkei Softさんでは、日本語教育を積極的に行っており、社員の中には日本語能力試験を受けている者が多くみられた。これにより日本とベトナムの友好的な関係を実感することができた。

2.2 ベトナム学生とのPBL

PBLでは、ハノイ工業大学の学生2人と龍谷大学の学生5人の計7人のチームで「UNIQLOの商品を売ること」を目標として、ベトナムの若年層の美意識調査を実施した。調査は、8月31日と9月1日の2日間にわたって行い、1日目は、仮説の構築やアンケート内容を決定したうえで、ハノイ工業大学の学内とハノイの中心であるホアンキエム湖周辺でアンケート調査をした。2日目は、初日のアンケート結果からアンケート内容を修正し、再びハノイ大学の学内で調査を実施した。アンケート調査を行うにあたって、一番苦勞したことといえば、言語の問題である。ハノイ工業大学の学生の英語はスキルが高いが、私の英語のスキルはアンケート内容の細かい部分を伝えるのに十分ではなく非常に苦勞した。自分に言いたいことがあっても、ハノイの学生の早い英語に圧倒され、自分の意志を伝えられずに話が終わったこともあった。ハノイ工業大学の学生に対してだけでなく、町中にいるベトナムの若者に対しても、自分から声をかけることに臆病になり、自分の英語の未熟さを感じた。この経験から、相手の言いたいことを理解し、自分の考えていることを伝えられる英語力の必要性を痛切に感じた。

2.3 南洋理工大学のキャンパス見学

南洋理工大学とは、1991年に設置されたシンガポールにある国公立大学の一つであり、毎年トップ

スクールにランク付けされている。英クアクアレリ・シモンズ（QS）が発表した世界大学ランキングでは、南洋理工大学は、東京大学を上回り総合11位であり、世界的にも高く評価されている大学である。今回、この南洋理工大学を見学してみて、まず初めに感じたことは、すべてにおいて規模が大きいということである。学生数は33500人、敷地面積は200ヘクタールであり、これは工科大学として最大級の広さである。また私たちは、南洋理工大学で行われていた熱伝導の授業にも参加することができた。授業をしてくれた Dr. Seri Lee は、大きなスクリーンに手持ちの紙を映して、図を書いて説明してくれた。難しい専門用語などもあったが、物理の公式や双曲線関数などは世界共通で、言語が異なっても同じ認識を持つことができるのだと感じた。授業を終えた後、学内にあるいくつかのラボも見学させてもらった。ラボ見学では、その研究室に所属している生徒が、研究内容や成果などを丁寧に説明してくれた。特に印象に残っているラボが2つある。1つ目が、電気自動車の研究をしているラボである。そこには、いくつかの電気自動車やオーストラリアを横断したソーラーカーなども展示してあった。私たちの「このような研究をするための資金はどこからくるのだろうか」という疑問には、スポンサーや大学側が負担してくれると答えてくれた。2つ目が、飛行機が飛び立つときのシミュレーションをドームスクリーンによって体験させてくれたラボである。飛行機が飛ぶときの空港での景色を精工に表現していて、実際に空を飛んでいるかのように錯覚させるほどであった。すべてのラボをまわり終えて、研究の質に驚かされた。また、自分の学びたいことを学び、研究している南洋理工大学の学生を見て、

自分も頑張らなくては、という気持ちになった。

3. おわりに

今回のプログラムを通して、普段では体験できないような貴重な経験をさせてもらった。初めての海外という不安から、このプログラムに参加することを迷っていた部分もあったけれど、自分を成長させる大きな一歩になったと思う。ベトナムのハノイ工業大学やシンガポールの南洋理工大学の学生と交流してみて、自分には足りなかった、何事も意欲的に取り組む姿勢や英語力をこれからの学校生活で培っていきたいと考える。特に英語力は、今の自分の英語がどれほど未熟で、海外の人とコミュニケーションを取ることが難しいか知ることができた。相手に自分の気持ちを伝えるためにもスピーキング力は特に改善していききたいと思う。勉学の方も、人に言われたからするといった受け身な考え方ではなく、自分の能力を向上させるために積極的に取り組みたいと思う。また、私は今まで、“仕事が安定している”という点で教員志望であった。しかし、海外で働くビジネスパーソンの方の話を聞いて、仕事に安定性を求めるのも一つの考え方だが、海外に出ているんなことに挑戦し体験することは、自分の生涯の中で意味のあるものになるのではないかと感じた。このように海外に出て働いている人から体験談や海外に移った理由を聞くことができたことで、自分の職業観が変化し、視野が広がったように思う。このプログラムで参加して得られたことは、これからの私の将来に影響を与えるだろう。

最後になりますが、ASEAN グローバルプログラムの関係者の皆様に、このような貴重な機会を与えて下さったことを心よりお礼申し上げます。